日本語のしらべ　　（東書　五年）

冬

目標

・「日本語のしらべ」＝「日本語の詩歌」を四季毎に集めた小詩歌集として味わいながら年間のまとめをする。

二時間扱いとし、第一次指導と第二次指導を混合した扱いになる。

〈区画〉　詩・短歌・俳句で七区画

第一時　第一次指導扱い　少し変則的な扱いになる。

一　よむ（音読　七名ずつ二回　計一四名）

二　とく（読後感の整理の話し合い）

○　題目（教材の輪郭を確認する）

・（日本語のしらべ　冬…　板書事項参照）

・「日本語のしらべ」＝「日本語の詩歌」です。詩歌のアンソロジーです。今回は、「冬」ということで集めたものです。

・写真を見ての感想を発表してください。

さびしい　寒そう　枯葉　水鳥

冬の朝　……。

・冬のイメージが浮かびます。「日本語のしらべ」は、五年生になって四回目です。教科書を開けないで思い出しましょう。百ページ前は、何をもとに集めたのでしたか。

夏。

・夏のイメージ写真には何が映っていましたか。

西瓜　カルピス　葭簀　…。

・涼を取る生活の工夫が出ていました。「秋」と「春」の写真は、どうでしたか。

秋…すすき　春…若葉

・それぞれに季節感が出ていました。四年生のときにも「日本語のしらべ」を四回勉強しました。それらを集めるとちょっとした詩歌集になります。調べてみると二年生から「日本語のしらべ」は始まっています。五年間、全部を合わせると立派なん詩歌集になります。ポストカードなどに書き出したりして、自分の詩歌集を作るのも楽しいでしょうね。（葉書ホールダーで詩歌集）

・「冬」について考えてみましょう。１ではどんな言葉が出ていますか。（１　板書）

北風。

・北風。（板書）鼻先や耳が痛み、頬かむりしたくなりますね。２は。（２　板書）

冬の月。

・冬の月。冬とあるね。実は、冬の季語になる言葉があるのです。予想して…。

千鳥。

・そう、千鳥が季語になっています。短歌では季語は関係ないのですが、千鳥が季語だと分かると、この歌のイメージがより出ますよね。（千鳥　板書）

・３は、何でしょうか。（３　板書）

寒い。

・寒い。（板書）４は。（４　板書）

霜焼け　蜜柑　風の寒きに

・三つも出てきました。（板書）５は（板書）

冬木立。

・冬木立。（冬こだち　板書）６は。（板書）

冬木。

・冬木（板書）７は（板書）

湯たんぽ。

・湯たんぽ（板書しながら）湯たんぽを使っている人は手を挙げて。その人は、この俳句よく分かるでしょう。また、明日、詳しく考えてみましょう。

・「冬」を題材にしていろいろな詩や俳句・短歌が作られています。冬の風景、冬の生活などどんなところをどういう風に作品にしているかをこれから味わいましょう。

・時間の関係で、今日は、最初の詩を味わいます。最初に、もう一度、読んでもらいます。次の人お願いします。

（代表　音読）

〈題目〉

・（「北風の中」と板書し）この詩を書いた人は誰ですか。

木村信子。

・木村信子さんです。（板書）この名前からすると女性でしょうか、男性でしょうか。

女性。

・その信子さんが、詩の中では「ぼく」と使っています。どんな効果をねらっているのでしょうか。（答えは求めない。間を置き）

・この詩の面白さが分かると、その効果がはっきりします。「北風の中のぼく」と「北風の中のわたし」を想像してみてください。

・これがこの詩の特徴の一つです。次に、この詩には、同じ言葉が繰り返されています。どんな効果をねらっているのでしょうか。

繰り返し風が吹いている感じがする。

・そうですね。また、リズムも生まれるでしょう。あと、五音と七音が多く使われていますね。これも、リズムを生みます。
・北風の中で、風から逃れようとしているでしょうか、それとも、北風に立ち向かっている姿が浮かぶでしょうか。
　立ち向かっているように感じる。
・その姿を想像すると「ぼく」という言葉が生きてくるでしょう。この「ぼく」という言葉は、どんな年齢と結びつきますか。
　少年期。

〈手引き〉
・この詩は、今の詩ではなくて昔を思い出して作っている詩ではないかな。そんなことを考えながら全文を写してください。

三よむ（黙読）
四かく（三よむと同時に視写　板書）
第二次指導指導扱い
五　よむ（音読　一名）
六　とく（板書部分について話し合う）
○　語義（難しい語句の解消）**・区分**
・難しい言葉はありますか。（質問なしでも）
・吼える　やっぱり　割る　少年期　は扱う。
・区分（四連を二区分）
◎　心（詩を味わう）
・ぼくは、北風とライバルか同志だと気付きました。どこに出ていますか。
　「北風も」と「ぼくも」の「も」。
・どこでぼくと同じだと感じたのかな。
　北風ごうごう吼えている。
・「吼える」と擬人化しています。それで、北風に向かって自分の心の内を叫び返します。そして、北風の力を自分の力にしようとしています。どこに出ていますか。
　もっと吹け　もっと高く跳ぶ。
・こんな気持ちになるのが、少年期にはあるのです。みなさんもこんな体験をする時が来るでしょう。その激しさを「ぼく」を主人公にした詩にしたところが、この詩の特徴です。

○　余韻　詩を覚えよう。覚えられそうだ。
七　よむ（全員で黒板の作品を音読）
・　暗唱（漢字だけ残してながら暗唱へ）

〈板書事項〉

日本語のしらべ　詩歌集
春　若葉　夏　カルピス
秋　すすき　冬　寒々しい

1 北風
2 千鳥
3 寒い
4 霜やけ
5 冬こだち
6 冬木
7 湯たんぽ

北風の中　木村　信子　←数字は板書なし

北風の中ぼくは駈けていく　（7・3・5）
北風の中ぼくはまたころぶ　（7・3・5）
北風ごうごう吼えている　（4・4・5）
北風もやっぱりさがしている　（5・4・5）
北風の中ぼくは夢を割る　（7・3・5）
北風の中ぼくの少年期　（7・3・5）
北風北風もっと吹け　（4・4・5）
ぼくももっと高く跳ぶ　（3・3・5）

第二時

一よむ　七名
二とく
○おさらい
・北風の中へ出たぼくは、北風を何だと感じたのかな。
　同志。
・北風の中のぼくは、転んでも転んでも走り続けます。すると、風の音が何に変わったのかな。
　声に変わった。
・そんな北風の声と自分の心のつながりに気づいた詩でした。

◎承接
・今日は、短歌と俳句を味わいます。（情景をイメージできるように問答する）生活の一こまを描いたのは、誰の作品ですか。
　俳万智　話しかける
　落合直文　蜜柑を剝く
　与謝蕪村　斧（雑木を薪や炭に）
　鳥居真里子　湯たんぽ
・残りの啄木と赤彦の作品は、冬の風景を描いています。それぞれどんな風景ですか。
　石川啄木　釧路の海
　島木赤彦　冬木林

○手引き
・同じ冬でも、その受け取り方は違いますね。その違いをイメージしながら写してください。（はがき大の紙に書かせるのもよい）

三よむ（黙読）
四かく（三よむと同時に視写　板書）
五　よむ（音読　六名）

六　**とく**（板書部分について話し合う）

○ **語義**（難しい語句の解消）・**区分**

・難しい言葉はありますか。（質問なしでも）

・千鳥 かな しのばゆ　冬こだち（冬木）

かんかんと　さざなみ　は扱う。

・区分（それぞれを二区分）

・短歌は、上の句と下の句にわけるが、赤彦の作は、視点の違いで分ける。

啄木（氷・千鳥と海・月）万智（話と感情）

直文（霜やけの手・蜜柑と忍ぶ親・風）

蕪村（斧・香と冬木立）赤彦（林と青空）

真里子（中のさざなみを抜く）

◎　**心**（短歌・俳句を味わう）

・短歌の（五・七・五・七・七）を確認します。それぞれの歌が生まれたもと、気付きは何でしょうか。（イメージの具体化）

啄木　（色　音　時間）一枚の絵

万智　（外の寒さと心の温かさ）対比

直文　（寒さで思い出すのは）

赤彦　（色　音）一枚の絵

・俳句の（5・7・5）と季語を確認します。その俳句の生まれたもとは何だろう。（イメージの具体化）

蕪村　（冬こだち）　香＝生きている

真里子（湯たんぽ）　布団まで

運ぶ楽しさ

○余韻　情景が浮かぶ。これなら覚えられる。

七　**よむ**（全員で黒板の作品を音読）

・　暗唱（漢字を残してと、順に暗唱に）

〈板書事項〉

北風もやっぱりさがしている
ぼくももっと高く跳ぶ

しらしらと氷かがやき
千鳥なく
釧路の海の冬の月かな

石川啄木

「寒いね」と話しければ
「寒いね」と
答える人のいるあたたかさ

俵　万智

霜やけの小さき手して
蜜柑むく
わが子しのばゆ風の寒きに

落合直文

斧入れて香におどろくや
冬こだち

与謝蕪村

まばらなる冬木林に
かんかんと
響かんとする青空のいろ

島木赤彦

湯たんぽの「中のさざなみ」
抱きけり

鳥居真里子

葉書ホルダー詩歌集

詩を写させるときに葉書サイズの用紙を用意しておいて、それに書かせます。空いた部分にはカットなどを入れたり、全体に彩色を施したりするのも楽しいでしょう。厚手の紙を台紙にしてもよいでしょう。

書き溜めた詩歌を葉書ホルダーに入れておきます。ある程度溜まったところで、自分の好みで編集するのもよいでしょう。

これは、星野富弘さんの絵ハガキから思いつきました。星野さんの作品は、絵が中心です。絵に添えられた詩が心を打ちます。

子どもたちに、自分が出会った詩歌の中で気に入ったものをこういう形で残す楽しさを味わわせたいなと思います。現職の時には、気付きませんでした。それぞれ工夫してください。